

令和7年度 熊野町立熊野第一小学校 研究推進計画

(1) 研究主題

自ら学びを進める児童の育成 ～児童が自ら問いをもち、振り返りの質を高める授業づくりを通して～

(2) 主題設定の理由

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）中央教育審議会（2021）」において、「急激に変化する時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」と示されている。また、学習指導要領を着実に実施するに当たり、「GIGA スクール構想により整備される ICT 環境を最大限活用し、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を充実していくことが重要である。」とも示され、特に、授業改善では、「学習の進め方（学習計画、学習方法、自己評価等）を自ら調整する力を身に付けさせることを一つの柱として行うことが考えられる。」と示されている。また、広島県教育資料では、「児童生徒一人一人が学びを自分事として捉え、興味をもって学び続けることができるようファシリテートするのである。そのために、教師は、児童生徒の深い学びを促す質の高い問いを設定し、その問いに基づいて単元を構想できる授業力を身に付けていくことが必要となる。」と示されている。つまり、これからの学校には、教師が質の高い問いを設定した授業づくりを行い、子どもたち自身が、自分のよさや可能性を認め、他者とともに学び合う中で、自ら ICT を活用して主体的に学習するなどの資質・能力の育成が求められていると考える。

熊野中学校学区では、令和6年度から広島県教育委員会「探究的な学びを中核とした『学びの変革』カリキュラム開発事業」の指定を受け、系統的に育成を目指す資質・能力を設定し、PBL（プロジェクト型学習）の考え方を参考に、生活科及び総合的な学習の時間の単元計画を開発・実践をしてきた。その中でも本校では、教材の特性を生かした授業開発に取り組み、自ら探究的に学ぶ児童の育成を目指して協働的な学びの場の設定を工夫した意図的な振り返りを行ってきた。昨年度までの課題として、本校の振り返りの形骸化が挙げられる。振り返りを書く習慣は身に付いてきたが、教師による評価の視点があいまいで、その質は高まってこなかった。また、学び合う場において、一方的に自分の考えを伝えっぱなしで、相手がそれを受け止めてくれる喜びを感じることができず、対話的な学びが成立しないこともある。児童自身が、学習の成果や成長に手応えを感じながら汎用的な能力を身につけて、「次は、明日は、だれとどんなことをいっしょに学ぼう（学びたい）」と児童自らが学習を前進させようとする姿を目指したい。

そこで、これまでの取組を基に、今年度は児童に身に付けさせたい資質・能力を

自ら学びを進める力を高める3つの資質・能力

- ・ 振り返る力 ～自分や友達の学びを振り返り、次の学習や生活に生かそうとする子～
- ・ 協働する力 ～友達と意見を交流しながら、よりよい考えを見付けようとする子～
- ・ 分かる・できる力 ～学習内容を理解し、それを基に問題を解決する子～

と設定した。児童自らが問いをもちながら学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって協働しながら学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげる等、学習の進め方を自ら調整し、主

体的に学習に向かっていく姿は、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を高める。そして、教師は、児童の思いや願いを大切にしながら質の高い問いを設定した授業や単元を構成し、教師のファシリテート力の向上を目指しながら、探究的な学びへとつないだ授業改善を進める。また、熊野町の「学力向上に向けた個別最適な学びの推進加配」による ICT の活用を含めた授業開発を行うことで、本校研究のさらなる推進をねらう。

(3) 研究仮説

児童自らが問いをもって協働的に学び合い、振り返りの質を高めることができれば、自ら学びを進める児童の育成につながるであろう。

(4) 研究内容

◎児童が自ら問いをもち、質の高い振り返りを目指した授業づくり

ア 問いの工夫

○「本質的な問い」「単元を貫く問い」「個別の問い」による授業改善

→教材研究により「個別の問い＝児童一人一人の問い」を整理・分析した単元開発と発問づくり

イ 振り返りの工夫

○「評価」の充実

→振り返りの視点（※）に基づいた単元や授業ごとの振り返りの変遷を記録するポートフォリオ評価

※「学習内容を深化、概念化、汎用化している振り返り・学びのつながりや他者とのつながりを意識した振り返り・児童自らの実生活への活用の可能性の見える振り返り・次時への学習意欲や課題を見出している振り返り・自己の変容を感じている振り返り」と「自らの学び方を意識している振り返り」

◎児童自らが協働的に学び合う授業づくり

ウ 思考の場の工夫

○「協働的な学習活動」の充実

→児童主体の話合い（※）の場を設定

※教師のタイミングで話し合う活動を設定するのではなく、「誰かに自分の思いや考えを聞いてほしい。」「悩んでいて答えが見つからないから話し合いたい。」など、学びの必然性に応じて話合いの場を設定する。

エ 学習環境の工夫

○「ICT」の充実

→授業者の ICT 活用した授業づくり（上記ア～ウ）

→児童自身の ICT 活用（※）を促す学習環境の整備

※児童自ら思考ツールを選択して活用し、考えを整理し、表現させる場や振り返りを PC で記録し、自ら学びの変遷を辿れるポートフォリオを作るなど、ICT を文房具のように活用できる学習

(5) 仮説検証方法及び達成目標

○教職員・児童への意識調査の実施と分析（学校調査アンケート）

○児童の学びに対する振り返りの分析（児童のノートや成果物等を授業研修等で交流）

【達成目標】

- ・自らの問いをもちながら学習を進めることができた・自分の思いや考えをもって友達と話し合うことができた
- ・自分なりの視点をもって学習を振り返ることができた・自ら ICT 機器を活用して学習を進めることができた

の調査項目 肯定的割合 80%以上

※年間研修計画（2025. 04. 08 現在）

- ①全体研修：全教職員で、授業研究や理論研修、協議会やワークショップを行う。成果及び課題を今後の単元開発や単元構成、また授業に生かす。
- ②ブロック研修（新採研修の示範授業を兼ねる）：各教科部会及び新規採用教員や管理職、希望する教職員が参観する。成果及び課題を今後の単元構成や、授業に生かす。

月	研修内容、全体研修授業公開教諭（学級／教科等）	講師
4月	○研究推進計画検討（研究主題、研究内容、検証の指標と計画） ○探究的な学びを中核とした「学びの変革」カリキュラム開発事業 →県指定 R6・R7（熊中学区） ○3日（木）教育研究推進委員会（本年度の研究内容・年間計画）	広島大学 大学院人間社会科学研究科 准教授 深谷 達史 （連絡調整中）
5月	○校内研修 ・今年度の研究推進計画について・授業実践に向けて ・各部の授業者決定 ○29日（木）前期研修 指導案検討① 部 年 ② 部 年	ブロック研修における授業研修日Ⅱ示範授業から選定（初任者研修年間計画に準ずる）
6月	○学校調査アンケートの実施 ○19日（木）全体授業研修 学年部 年 授業者：教諭（ — / ） ○26日（木）全体授業研修 学年部 年 授業者：教諭（ — / ） ・国語部 ・算数部 ・生活・総合的な学習の時間部 総 or 生活 ・特別支援教育の在り方を生かした授業づくり部 特支 or 専科	
7月	○24日（木）後期全体研修 指導案検討③ 部 年 ④ 部 年 ○夏季全体研修	
11月	○320日（木）全体授業研修 部 年 授業者：教諭（ — /科）	
12月	○学校調査アンケートの実施 ○44日（木）全体授業研修 部 年 授業者：教諭（ — /科）	
2月	○学校調査アンケートの実施 ○研究成果の取りまとめ ○ユネスコスクール活動調査回答及びユネスコスクール活動作成	
3月	○全体研修（来年度に向けた研究推進計画の策定）	